

(国際会議報告)

第 20 回国際昆虫学会議に参加して

農林水産省北陸農業試験場 ^{おお}大 ^や矢 ^{しん}慎 ^ご吾

第 20 回国際昆虫学会議は、イタリア中部のフィレンツェで 1996 年 8 月 25～31 日に開催された。この会議は 4 年に 1 回開催される昆虫学関係の最大の学会である。科学技術庁の科学技術振興調整費「重点基礎」の予算を得て参加する機会を得たので、会議の雰囲気と印象を述べてみたい。

フィレンツェは 13 世紀以降商業の中心地として栄え、15～16 世紀のルネッサンスの発祥の地として知られている。ミケランジェロやレオナルド・ダ・ヴィンチなど多くの芸術家や科学者を生みだしたところであり、石造りの巨大な教会や宮殿が市内の各所にある。過去の繁栄を示す芸術品が数多く残されており、街全体が美術館と呼ばれる歴史と芸術の都である。

会議リストに登録された参加者は 80 か国、約 2,750 名 (以下、1 桁の数字は四捨五入) に及んだ。参加者の多い国はアメリカ 510 名、イタリア 330 名、日本 300 名、イギリス 210 名、ドイツ 200 名、フランス 120 名、ブラジル 110 名、オーストラリア 90 名、スイス 80 名、韓国 60 名、中国 50 名などであった。一方、参加者が 5 名以下の国は 42 か国、そのうち 28 か国は 1 名の参加者であった。

会議は市の中心部にある大会議センターおよび隣接した会場で行われた。毎日 8 時と 14 時の 2 回、大ホールにおいて招待講演によるシングルセッションが 45 分間行われ、その後 9～13 時、15～19 時にシンポジウム、ワークショップ、一般発表が 17 会場で行われた。これらの発表は 24 部門に分けられ、その内容は次のとおりである。

分類・系統発生学、昆虫の多様性と生物地理学、形態学と微細構造、発育と増殖、生理学と生化学、神経科学、免疫学、遺伝と進化、分子生物学と遺伝子工学、生態学と個体群動態、特殊環境昆虫学 (洞窟など)、行動学、社会性昆虫学、養蚕学、農業昆虫学、森林昆虫学、熱帯昆虫学、貯穀昆虫学、毒物学と薬剤抵抗性、天敵と生物防除、昆虫病理学、総合的害虫管理、人・家畜の昆虫学、植物検疫と処理技術。

各部門には 5～10 のシンポジウムまたはワークショップのテーマが設けられ、延べテーマ数は 150 余りであった。それぞれのテーマについて約半日をかけて話題提供と討論が行われた。このようにして口頭発表された課題数は 1,550 題であった。これを見ても明らかのように、

昆虫の基礎科学から応用科学まで広い領域の発表が行われた。水稻害虫の防除技術の改善を目指して日頃研究を進めている者にとって、昆虫学の領域の広さを改めて感じさせられた。作物保護に係る発表では、果樹類、麦、大豆、イモ類、牧草、綿花、熱帯作物を扱ったものが多く、水稻に関するものは非常に少なかった。

会議が晩夏の高温時に行われたためか、シンポジウムのオルガナイザーなど一部を除き、ほとんどの参加者はノーネクタイで T シャツやジーパン姿など、くだけた雰囲気であった。発表会場では、最近我が国でも見られるようになった目の醒めるような配色のスライドを用いて最少のデータを示し、口頭で説明するものが多く、なかにはデータフリーで 1 桁の単語数の文字スライドで説明しているものもあった。かつて多くのデータを小さな文字で示し、判読できない図表に出会うことがあったが、発表方法について学ぶところが多かった。

ポスターセッションはバツツ城塞の中にある商品見本市を行うような広い建物の 1, 2 階を用いて行われた。発表総数が 1,690 課題に及び、1 課題について縦 2 m、横 1 m のボードが用意され、非常に規模の大きなポスター発表会場となった。発表者は 26～29 日の 4 日間、13～14 時の 1 時間ポスターの前に待機し、参加者と質疑応答する形式であった。参加者は前もって発表プログラムから目的とする課題を選び、迷路のような会場で発表番号を頼りに、目標とするポスターを探し出さなければならぬという状況であった。

我が国からもシンポジウムやポスターセッションで多くの発表が行われた。私どもの研究室ではツマグロヨコバイの耐虫性利用に関連する 3 課題をポスターセッションで発表した。できるだけ人目を引くように工夫してポスターを作成したが、大きな会場で目立つことはなかなか困難であった。

会議 4 日目の 28 日 21 時から、学会主催のオルガンコンサートが中世に建設されたサンタクロチェ教会で催され、また、30 日 21 時からポスターセッションが行われた会場で約 1,500 人が参加する懇親会がイス席を設けて開かれた。フィレンツェのあるトスカーナ地方のワインと料理が準備され、午前 1 時に自由解散となった。このような催しを通して、イタリアの歴史や文化を身近に感じる事ができた。